滋賀医科大学附属図書館

上 原 正 隆*

滋賀医科大学教務部図書課

I. はじめに

京都駅から20分。JR琵琶湖線（東海道本線）の瀬田駅からバスで10分程南に向くと、琵琶湖を見下ろす高台に滋賀医科大学がある。滋賀県立図書館、滋賀県立美術館などの文化施設が建ち並びわこ文化ゾーンに隣接し、比叡山などの琵琶湖をとりまく山々を一望できる美しい緑豊かな自然環境の中にある。本学は、地域の特徴を生かし、従来の慣習・制度にとらわれない新しい独自の医学の教育・研究機関を構想し、昭和49年10月の開学以来、幾多の医学者、医療人を育成してきた。

II. 附属図書館のあゆみ

附属図書館は、開学当初、守山市守山町仮校舎に設置され、昭和51年8月の本校舎一部完成とともに現在の大津市瀬田月輪町に移転した。大学のほぼ中央に位置し、中庭に面した鉄筋コンクリート2階建てで、延べ面積は1,680㎡であった。その後、図書館資料の増加とともに書架の狭隘化が進み、図書館の増築が急務となった。平成11年9月、既設図書館棟に増築する形で、附属図書館とマルチメディアセンターとの統合建物である「コラボレーションセンター」が完成し、現在に至っている。建物は2階建てで、延べ面積は3,133㎡である。マルチメディアセンターについては、平成5年度に学内LANが敷設された後、平成9年度に教育研究情報システムや学内LANの管理運営、学外に対する情報発信の支援を行う目的で設置されたものである。コラボレーションセンターへの施設統合により、学内の数カ所に分散配置されていたマルチメディアセンターの施設・システム機器等が集中化でき、情報処理分野において、より有機的かつ効率的な教育研究へのサポートが可能となった。一方、

附属図書館においては、マルチメディアセンターとのより緊密な連携のもとに電子図書館的機能の充実をはじめとする学術情報の提供に取り組む環境が整備された。この施設統合の詳細については、医学図書館49巻1号（2002年）で述べているところである。

III. 附属図書館の案内

附属図書館の館内を見取り図に沿ってご紹介しよう。1階には、玄関ホールに隣接して、ブラウジングコーナーと情報検索コーナーを設置しており、ブラウジングコーナーでは、衛星放送も視聴することができる。閲覧室には、欧文雑誌を配架しており、1989年以前のは集密書架に配架している。また、カウンターの近くに医学史資料の展示コーナーを設けて、附属図書館の文庫の中から展示を行っている。当館の医学史関係の文庫には、「河村文庫」と「守一堂文庫」があり、「河村文庫」は、旧彦根藩医師であった河村家から寄贈された史料で、江戸時代の医学史資料、492種、1,800冊を収めている。「守一堂文庫」は、近江八幡市の安倍家から寄贈された史料で、安永5年に開業ののち伝えられた、和漢書150種837冊を収めた医学史資料である。

*Masataka UEHARA : 〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町.

(2003年5月29日 受理)

2階には、図書と和文雑誌を配架している。和文雑誌も同様に、1989年以前のは集密書架に配架している。図書の分類については、専門書のうち医学関係はNLMC、生物学関係はLCC、その他一般図書はNDCで行っている。また、視聴覚利用室や個別のキャレルで学習できる自由閲覧室を設けている。

平成15年3月現在で、蔵書数は図書139,468冊（和書65,530冊、洋書73,938冊）、雑誌2,082種（和雑誌758種、洋雑誌1,324種）。年間受入数は、図書3,007冊（和書1,442冊、洋書1,565冊）、雑誌811種（和雑誌396種、洋雑誌415種）。入館者数は123,208人で、貸出は、図書14,451冊、雑誌5,970冊。学外文献複写は、受付6,640件、依頼5,195件といった状況である。

開館時間は、平日が9時から20時、土曜日が13時から17時で、日曜日・祝日、大学創立記念日、年末年始が休館日である。ただし、時間外「特別利用」として、24時間自動入退館システムが利用できる。平成7年4月に教職員、大学院学生を対象にサービスを開始し、その後、利用状況を考慮しつつ、現在は4年生以上の学部学生の希望者まで利用を行っている。平成12年4月から本学学生の学外臨床実習協力病院に対してもサービス対象としている。また、図書自動貸出返却装置（ABC-II）を導入し、時間外「特別利用」においても貸出が行えるようになっている。

平成10年度から学内LANを介して医学関係の電子的情報資料の提供を行っている。当初、医学中央雑誌等の医学関係二次データベースの提供が中心だったが、平成13年度からは、Evidence-Based Medicine Reviews (EBMR) やCINAHL、平成14年度からは電子ジャーナルの提供を開始した。現在、Science Direct（ライフサイエンス6分野）、ProQuest Health & Medical Journal、Blackwell Science and Medicine、Nature、Science等が利用できる。電子的情報資料の提供と併せて、それらの利用講習会を企画し、利用者教育にも努めている。

IV. 最後に

学術情報の電子化の進展に伴い、学術情報の流通形態は従来のものと大きく変容してきている。このような転換期にあって、大学図書館は、大学の教育・研究の活性化をはたすべく、学内の学術情報の流通基地として、学術情報の収集・発信機能を強化していくことが求められている。今後、コラボレーションセンターの情報インフラを基盤として、マルチメディアセンターをはじめとする情報関連諸部門と更なる緊密な連携をとりつつ、情報流通を担う中核的機関として、どのように電子図書館的機能の拡充を図っていくかが課題である。

館内案内図